

立原道造「はじめてのものに」のモデルに関する守旧説

大森郁之助

立原道造の第一詩集『萱草に寄す』の巻頭篇「はじめてのものに」(初出『四季』十二号、昭10・11)の素材については、従来、昭和十年八月の浅間山の小噴火の夜に滞在先の信濃追分で体験した、学友柴岡亥佐雄氏の遠縁の女性(横田ケイ子さん)との出会いがそれと考えられてきた。その根拠は、整理すれば恐らく次のようになる。即ち、右柴岡氏の回想に

その年の夏休みに信濃追分から、立原は是非来る様にと誘いの手紙をくれた。(略) まだ焼けない前の古い油屋(引用者註、油屋の焼失は十二年秋)の二階で、彼のねぎらいを受けながら煤けた低い天井をみつめて居たとき、突然の震動に私は飛び起きた。(略) 雨はもうやんで居たが綿の様な霧で、教軒先の街道の家並みさえ消えて見えない。 / サラサラと音をたてて落ちる火山灰の道を散歩して街道へ戻って来た時、私にまた意外なことが起った。追分では珍らしい四五人づれの婦人の散歩客が、東京では殆ど会って居ない遠縁の人達であった。その晩招かれて二人でその家を訪れた。丁度私達と同じ年頃のお嬢さんが二人居て、避暑地の薄赤い裸電球の下で、洗い髪をなびかせて、高原の蛾を追う白い手など、私だけの印象ではなかったと思う。立原の詩や手紙にその後、エリザベートの名をみる様になった。立原にとってエリ

ザベートは一人でなかったかも知れない。然し私達の話題に上るエリザベートは一人であった。

(「追分を訪ねて」。角川版五卷本立原道造全集月報4号、昭33・7)

と、(イ)「はじめてのものに」に歌われたのとはほ似た情景が実在し、(ロ)その女性が立原によって、「はじめてのものに」の第四連の

(略) 果して夢に / その夜習ったエリザベートの物語を織つたと同じ「エリザベート」の愛称で呼ばれるに至った旨を述べている。ちなみにこの年の柴岡氏の追分滞在は八月「十六日に来て十九日まで」(昭10・9・4柴岡氏宛立原書簡)でその間の浅間の噴火はべつ立原書簡(8・18生田勉氏宛)に「(いま、柴岡があとにきてゐる。)あさまがきのふ爆発した。灰がふつた。十八日誌す」とある。一方、「はじめてのものに」の制作については九月二十一日付の柴岡氏宛立原書簡に「エリザベートとのめぐりあひをうたつて、『はじめてのものに』といふ詩を書いた。四季の十一月号に出した」とあるのが最も早く、同月十三日付の同宛書簡では右の〈原体験〉そのものには触れながら作品化のことは未だ云っていないので、この二書簡の間の時期の成稿と考えるとよからう。

そして「エリザベート」という作中ヒロインの呼称(『萱草に寄す』

収録形では「エリーザベト」と改める）が立原の書簡に現れるのはそれより早く、九月四日付柴岡氏宛で初秋の避暑地の風物報告の中に

エリザベートはしのぶによしなけれど、自転車で往来を走るアンナはもう帰つてしまつた。

と用いるのが、現存資料では最も早い。しかし、ここで「エリザベト」の語が何の説明も伴わず、いわば自明の呼称のごとくに用いられている事からみると、柴岡氏との間ではこれ以前に成立していた（右書簡は柴岡氏の帰京後立原からの現存第二信だが、第一信8・28付にも説明は見えないから、恐らく氏の追分滞在中に成立していた）ものだろう。またこの呼称は翌十一年にも夏の信濃追分からの消息他に現れるが、反面、現在伝わっている立原書簡の範囲では柴岡氏宛のものに限られる。前引柴岡氏の回想記で「立原にとって……一人でなかつたかも知れない」というのは、ヘリザベートと同じような役割を果たした女性……の意と解すべく、他の女性をもエリザベートと称んだ疑いではなからう（そういう疑いを柴岡氏がいなく、根拠がない）。

以上の事情からして

(1) 八月十七日の夜に識った柴岡氏遠縁の女性が

(2) 恐らく八月十九日（柴岡氏の帰京）以前、遅くも九月初までに「エリザベート」と愛称され

(3) 九月中旬に詩篇に結晶した

という形成過程を推定するのには、これといった疑念の余地はなさそうである。

ところが先頃、エリザベート体験が「この詩の下地にあることは、間違いないと思」うが「その上に蔽いかぶさるようにして」「重なる」別の素材として、エリザベートとの出会いの約三週間後、九月九日から追分を訪れた（昭10・9・9柴岡氏宛立原書簡）箏曲家今井慶松氏

令嬢との体験を主張する説が現れた。雑誌『文芸広場』昭和五十七年一〜三月号掲載の対談「立原道造との出会いと別れ」（今井春枝・福原匡彦氏）が、それである。

右、十年九月九日付の立原書簡で「今日、今井慶松といふ人のお嬢さんが来る」と紹介され十三日付では「今井さん」と呼ばれている女性については、これまでに長女慶子さん・次女春枝さん（現姓山根、筆名治枝とも）の二説が出されており、現在まだ完全に決着しているとは考えられない（小著『立原道造論』昭51・5桜楓社刊、48・49・60・67頁参照）が、それは当面の問題ではないので、最近大勢を占めるに至っており右の対談もその立場である（春枝さん説）に、仮りに拠つて話を進める。連載第一回の半ばで早々と福原氏の示している結論（この対談は聴き手の筈の福原氏が自分の構想するへ立原と今井氏の出会いと別れを解説してゆき、構想の大筋には差し障りのない細部について時々今井氏に誘導尋問を仕掛けて自己の推察の裏付けをデモンストレートする、という形になっている）は

ちやうど、今井さんが油屋に数日お泊りになって、立原の心の動きに深い影響をお与えになった直後だけに、この二つの詩（はじめのものと）及び同時初出の「またある夜に」は今井さんと大きなかわりを持つのです。

というものである。

云うまでもないが、右（結論）の前半の「立原の心の動き」への「影響」は、いかに「深」くても（それが立証されたとしても）、そのことだけでは特定作品の素材乃至契機になつてゐることを推断できない。作者は常にその時点の最大関心事を（又は、それによって）作品化するものだ——第二位以下の関心事が作品を形成する事はない、と決まっているものならば、文学研究は作品本文を読むこと無く伝記的探索のみによってその過半が果たされることになる。へ心への影響がど

う確認されようとも、その体験の作品への関与は、〈へ心への影響〉がどうあろうと兎も角その名辞が作品本文中に存するのだから否応ないエリザベート体験のそのようには、簡単に謂えないのである。ついでながら、その〈へ心への影響〉にしても、今井氏に聴く形の対談では当然同女と立原との間の新情報が出て来る訣で、それらを加えての〈今井氏の影響〉トオタルと、従来の文献資料しかない「エリザベート」のそれとを比較して前者の優越乃至卓抜を結論するのはフェニアであるまい。例えば、対比のしかたは少々異なるが、今井氏が結婚後夫君に命ぜられて立原の手紙を焼き捨て交際を断つ旨書き送った、と語ると、福原氏は即座に「手紙を焼く話は、物語の『鮎の歌』というのに出てくるのですが、同じことが二つ重なるとは考えられませんか（略）これまで鮎子さんに関することと考えられていたことが、実は今井さんに関する事柄だったということ」だ、と受けて、「立原文学の解釈」の修正を宣してしまう（第二回）。同じ事が二つ重なるのは「絶対にはいえないと思」う、と切り捨ててしまふのだが、今井氏の夫君とありえないと思「う、と切り捨ててしまふのだが、今井氏の夫君の指示はそれほど稀に見る無理解・横暴だろうか。この軽率の根源は論者のフェミニスト風結婚観にあるのか、それとも、今井氏が最大卓抜の恋人なのだから同レベルの悶着は他の女性には有り得ないという、先験的な排他律か。

話を元に戻すと、福原氏も〈へ心への影響〉のみによって、**「それと同一事象として作品への関与を断定しているのではない。氏の『物証』は、作品そのものではないがしかし実生活の行為自体でもなくて、いわばその中間段階の、作品の素材のスケッチともとれる立原の書簡である。九月十三日付（「はじめてのものに」の成稿が確認されるのは二十一日付、前述）柴岡氏宛に**

僕は今井さんとはなしをしてゐるときよびかけるのにならうつかります

るとケイ子さんといつてしまひさうでならない。それは何か仕方ない感情であつた。だが仕方ないだけでそれはもう何でもない永遠の記憶にかがやいてゐる瞬間だつた。明るい谷のやうに、暗い部屋の隅々までモツアルトで溢れてゐた。火山の灰が、かすかに音をたてて樹々の葉につもつたと語りあつたこと、蛾が何匹もそのひとのまはりにうるさく飛んだこと、もうそれは、夢のなかの出来事がほんたうのことだと主張出来る程にしか、ほんたうだとはいひきれない。かすかな、出来事になつた。

とあるのを、福原氏は「二つの夜の情景が溶け合うだけでなく、ケイ子さんという少女までが今井さんの中に溶けこんできている感じが」する（第一回）、と言う。〈二つの夜〉とは、一つは柴岡氏の「追分を訪ねて」に描かれたヘリザベート体験の夜、もう一つは本対談の相手今井氏が山根治枝の名で発表した「信濃追分の立原さん」（角川版六巻本全集月報1号、昭46・6）に回想する、氏が次の情景を立原と共にした夜である。

私が薄暗い電気の下で読書をしていると、食事の時にTと名乗った青年（引用者註、立原とは別人）が、これからレコードをかけるから、よかったら聞きに来ませんか、と誘いに来てくれた。（略）突き当りの、二方に窓のある小部屋で、皆の姿は見えず（略）向って左の窓辺に、立原さんが浴衣の膝を抱えて、あの独特の仔鹿の眼をして、私の方を見つめている。（略）やがてTさんのかけてくれたレコード、「未完成交響曲」は静かに流れて、おりから空中に昇ろうとしている月の光と相俟って、まことにロマンティックな雰囲気だったにもかかわらず、白い粉をまき散らしつつ、電灯の廻りをグルグル廻っている蛾が、私の側に飛んで来るたびに、手で払いのけるのに忙しく、せっかくの美しい曲も上の空であつた。／＼Tさんが気をきかせて、電気のスィッチを切つ

てくれた。その時、誰かが丁さんに用事があるとのことで、彼は階下へ行ってしまった。／＼二人っきりで取残されたその数分(註2)の、何んと長く感じられたことか。

この今井回想の情景も確かに柴岡回想に劣らず、立原書簡の情景「明るい谷のやうに」云々に似ている。音楽が流れている点は柴岡回想以上に似ているようにも見えるが、反面、その曲名が立原書簡の「モツアルト」に対して「未完成交響曲」なのは、大きな躓きとなる。この相違を対談では

○その晩にきいたレコードは、今井さんのご回想によれば、シューベルトの「未完成」ということになっていますが、モツアルトはおききにならなかったのですね。

○ええ、モツアルトでは絶対にございません。「未完成」でございました。

と確認した挙句、

○そうすると、結局「モツアルトで溢れてゐた」というのが分らないのですが、手紙を書くときの詩人の気分だったのかもしれないね。

という福原氏の自問自答で打切っている(第三回)。

だが、この対談では前にも触れたように全体の流れが殆ど、福原氏によって予め用意されたへ立原君今井ロマンス像に合わせて一方的にリードされ展開しており、今井氏は概ね極めて素直に誘導されている。また今井氏は前言の訂正撤回も融通無碍の観があり、例えば「信濃追分の立原さん」で「追分での彼の姿を見たのは」十年九月が「最後だった」と述べたのと、この対談の中で自分が相手と認めた(第二回)十一年七月の追分・軽井沢同道及び別れ際の水晶十字架授受の件(立原「花散る里」「鮎の歌」及び11・7・11猪野謙二氏宛書簡など)との、年次の矛盾にふれられると、「ああ、そうでございますか。ま

ことに申しわけございません。勘ちがいでございました」と、十年前の文章を遅疑なく取消す(第三回)。この前言撤回によって、前言に基づき十一年の水晶十字架の女性を別人と見た某研究者の説(福原氏が紹介している)は一ぺんに消滅し、ロマンティックかつ劇的な別れに終る恋のヒロインというこの対談のイメエジが守られる結果となるのだが、こう簡単に勘ちがいと判る——以前にはそれほど簡単に勘ちがいをした——とすると、それぞれの発言に基づいて考察するのが空恐ろしくもなろうというものはある。

さて、そのように柔軟性に富む語り手の今井氏が、立原と聴いた曲名についてはへ分らないが、詩人の気分だったかという遁辞で打ち切る他なくさせる——福原氏のへ構想にどうにも収まらない前言を、固守する。「未完成」だった、というのは考え直す余地のない、よほど強烈な印象・明確な記憶だったかと思われるが、一方の立原も翌一年に入って猶、

その夜はとほかつた。やはり月がぼんやり出てゐた。音楽をきいたかへりの夜道だつた。トルコ行進曲をきいた夜だつた。その夜がたのしかつた。その追想は、しかし、エリザベトのことではないのだ。その日の夕方の追想だつた。(略)あのととき、火の見櫓の下で、僕は君と、自転車にのつた少女を見た。もう日が沈んで夕靄が溢れてゐた。あれは一年ぶりで、僕と少女とのめぐりあひだつた。(昭11・3・12柴岡氏宛)

と書く。例によって判りにくい表現だが、たのしく思い出している対象はエリザベトならぬ夕方に見た自転車の少女であるけれどもそれは夜に入ってトルコ行進曲を聴いた日のことであり、そのトルコ行進曲はエリザベトと一緒に聴いた、と云っているのである。そしてトルコ行進曲といえは常識的にはベートーベンかモツアルトだから、前年九月の書簡の「モツアルト」云々は改められていない訣である。

〈詩人の気分〉による虚構とすればよくよく根強い執着だが、しかし、例えば最初に〈気分〉が発動した(？)九月十三日付書簡の直前、十年九月四日の柴岡氏宛には

この頃は、油屋の蓄音器で油屋のレコードをきいてゐる。油屋には、モツアルトのものや、ヘンデルのものがある。泊つてゐる人は、ひとりにはベエトオベン、ひとりはショパンをすこし持つて来てゐる。はじめ、ベエトオベンを持つた人が音楽をきくといひだして、第五をかけた。僕、おそれるに一日中第五をくりかへすのかと思つた。ところがさうでなく、すこしづついろいろな所からレコードがあらはれて来た。なかなかたのしい雨の日になりました。

と、第五の反復への危惧以外は、「未完成」忌避もモツアルト偏執も見られない。前々からの好みではなく〈手紙をかくとき〉突発した気分、しかしその後は翌年三月まで持続した、というのは余りに御都合主義過ぎよう。

〈詩人の気分〉と逃げてしまった福原氏も恐らくこの「説明」自体の妥当性を確信している訣ではなくて、今井氏が再度断言する以上モツアルトでなかったことは判つたのだから、その余の事——立原の虚言の事情など今更どうでもよかつたのかとも思う。しかしそもそも「モツアルト」と「未完成」の齟齬の解釈は二様ある筈で、一方の虚言というのも一解だが、二人が別々の折を回想したと見ても齟齬それ自体は解決する。譬えば(あくまで、譬えば)今井氏と立原が二夜にわたって一緒にレコードを聴き、その中でモツアルトを聴いた夜のほうを立原が回想し、また別の未完成を聴いた夜のほうを今井氏が「信濃追分の立原さん」に書いたのかも知れない、とは何故疑われないのか。立原の方はその夜以外には聴かなかつたとは書いていないし(書く必要もない)、今井氏の方は、回想記が三十数年後、対談が四十数

年後のことで、その間、昭和十一年の結婚直後に手紙も全部焼き捨てたという(対談第二回)、いわば氏自身の内面でも長年月地下に密封されてきた記憶なのである(私などは現在の家人と婚約中に聴きに行ったコンサートの回数もさだかではない——曲目など、もちろん)。

もっともこれはあくまで譬えばの話で、それが存在したという確証はない或る夜を想定したりする前に、明らかに存在はした二つの夜、エリザベートとの夜と今井氏との夜の、前者を柴岡氏宛書簡で立原が回想し、後者を今井氏が記憶している、という組み合わせ(くいちがい)を何故考えてもみないのか。考えずに済む(本当は済まないのだが、済んだと錯覚する)心理を臆測するなり、恐らく、次のように整理し得る読解過程で、註記したいずれかの踏み違えがあつたのだろう。即ち、

①立原書簡で「今井さんとはなしをしてゐるとき……ケイ子さんといつてしまひさう」というのは、現前の「今井さん」が「前の横田ケイ子さん(引用者註、エリザベート)の像とダブってくるところからそうなる」ので「ケイ子さんという少女までが今井さんの中に溶けこんできている感じ」(対談第一回)を謂っている。つまりその限りでは、二人の女性にふれている(と、福原氏も認める)訣である。

補説 「今井さん」については従来姉慶子さん・妹春枝さんの二説がある(前述)ので、春枝さんとすれば「ケイ子さんといつてしまひさう」になるのは別人のイメエジの交錯しか有り得まいが、慶子さんであれば別人の関与はなくて単に姓でなく名を呼びたい親近感とも解釈される(但しその場合も、同名の別人「ケイ子さん」への親近感或いは実際の呼びかけの交錯、ということは有り得よう)。しかし本対談は春枝さん説を前提とするから、頭書の理解に固定されることになる。

②従って、後文の「モツアルト」云々を含む情景は、可能性としては「今井さん」をめぐる情景（今井さんとの夜）とエリザベートをめぐる情景との二つが有る。

補説 前項①によって、二重写しになった映像の手前側か奥の方かの差はあっても、ともかく二人の女性像が画面に現れた訣であって、その後「モツアルト」を含む情景描写をされるに適わしい。関連イメージの継起力が強いのは、手前側に在る。語られている現時点の対者であるという点から「今井さん」の方か、それとも、現時点には存在しないのに喚起されて来る程の印象の深さからエリザベートの方か。この段階では一方に絞ることはできない。

補説の二 「モツアルト」を含む情景は「今井さんとはなしを……」以下の一節全体の憧憬や夢想のクライマックスだが、それなら当然この時期立原が最も心をひかれた女性で、今井氏の筈、というのは粗雑すぎる。この時期全体での総量や期間中の平均値としてなら、最も心をひかれた……という考え方は原則的に可能だろうが、その中の一時点・或る瞬間をとらえれば心の揺らぎというものも有ろう。本節がそうした例外的心理・発想でないという保証はないし、だいいち、〈最も……女性〉が今井氏かどうかも本対談での恣意な思い込み以外では明確でないのだから、無意味である。（もしもこの段階で「今井さん」

|| 対談者今井氏をめぐる情景と決してしまえば、今井氏はその記憶通りに「未完成」を立原と聴いたのだから、立原は他の曲もエリザベートと聴いたのだといったへヒロイン別・二曲両立案は雲散霧消する。また今井氏は「未完成」を聴いたというだけでなくモツアルトは絶対に聴いていないと言っただけから、同じ立原と今井氏の間での第一夜と第二夜といったへ時間

別・二曲両立案も不成立で、福原氏が目の前の対談相手今井氏の錯覚・虚言を疑う非礼を敢てせぬ限り、立原の虚構とする他なくなる訣である。)

③前項②及び補説から、「モツアルト」を含む情景が誰に関わる(↓)いつの・何処での)ものかは細大いずれの伝記資料によっても決せられず、この情景の叙述が導かれたなりゆきからも定まらず、この部分の表現自体から判定する他ないことになる。その際最も明瞭な手がかりと思われるのは、この部分の時制が前文と変わっていることで

a 「今井さんとはなしをしてゐるとき」についての叙述が「……ならない」と現在形なのに対して「モツアルト」云々を含む「それは何か仕方ない感情であつた」以下が回想形なのは、有意味とすれば、別のより以前の出来事であるためと解する他ない。

さらに、叙述の態度に於て

b その「それは何か……」以下が著しく(前文に比して)詠嘆的で説明的要素を欠くのは、事実説明の必要がない。書簡の宛先の柴岡氏が既に知っている事柄である場合に、最も納得しやすい。

a・bに適合するのは、(a)「今井さん」との出会い(九月九日)に先行し(b)柴岡氏と共有の体験であるところのエリザベートとの夜(八月十七日)である。

立原書簡の主旨からいえばここで立原は、恐らく日付日の前夜の「今井さん」との語らい(書簡の初めの方に「油屋ぢゆうには、もう二人きりであつた。よる九時半まで、だべつた。《略》いろいろのはなしがあつた。それは、かなしみやたのしいことに就てであつた」と

ある)に触発されて、過ぎた日のエリザベートにいだいた感情を蘇らせ、わかつて呉れている柴岡氏相手に詠嘆したものであろう。

本稿での問題に即していえば、今井氏の「未完成」の記憶とは別に(殊更その正しさを証しもしないが、二者択一式に誤りとする関係ではなく)立原はモツアルトの曲をエリザベートと聴き、その記憶を九月十三日付書簡に述べたのである。従ってもしこの書簡の叙述が「はじめてのものに」に繋がっているとすれば、エリザベート体験が、
 「エリザベート」という名辞の相通に次いで二つ目の、「はじめて……」の素材たることの証拠を得た訣である。今井氏との体験が「はじめて……」の素材となったという証拠は、ここには見出せない。
 但し云うまでもあるまいがこれは、今井氏が立原の心(実生活者としての、又、詩人としての)に与えたものの大小軽重を、エリザベートのそれとの比較に於てすら、ただちに示すものとは思われない。それは逆の形で前に述べた通りである。

註1 前文に「昭和九年の春」の記述があり、その続きとしてはここも九年夏

ともとれるが、翌十年夏の立原書簡での信濃追分への誘い方等からみても柴岡氏が前年既に追分を訪れていたとは考え難く、とくに問題とするには及ぶまい。

2 後に対談の第三回で福原氏が、「Tさん」を交えず今井氏と立原の「二人だけで九時半まで語り合った(引用者註、前引柴岡氏宛10・9・13付立原書簡)」という「九月十二日の夜を追加して「計三つの夜の情景が溶け合っているということになる」と修正しているが、氏の説全体の着想と論理には変動はない。

追記 本稿でその論法の欠陥を指摘したことになる対談の掲載誌『文芸広場』は「教職員の文芸誌」と銘うち、一般書店の店頭では余り見られないかと思われ、私の場合それまで未知の福原氏から恵送を受けてはじめて手にした物である。従っていわば資料提供者である同氏に恩を誓で返したように見えると不

本意なのだが、じつはかつて、その一年ほど前にやはり座談会で当事者の記憶として提出された或る「新説」に、「拠っていない」からという理由付けをされて(その「新説」は当時既に有力な反論が雑誌連載中だったし、現在はほぼ旧説に戻っている)某学会誌への投稿が没になった経験が私にある。今度もどなたかが、この対談の「新説」を未検討のまま原稿採否の基準にされる憂き目を見ないとも限らぬと気づき、公害予防の一助を希って牛刀を執った次第である。大方の諒を乞う。

(昭59・9・19稿)